

障がい児と障がいのない児の交流機会に関する
調査・研究業務

報告書

令和8年3月31日
株式会社 ポロワッカ

目次

1 事業概要	1
(1) 事業の背景と目的.....	1
(2) 訴求対象	1
(3) 調査研究の設計	1
2 試行的イベントの実施① アート系イベント	3
(1) 開催概要.....	3
(2) 参加者募集方法.....	4
(3) アンケート実施方法	5
(4) 当日の様子	5
3 試行的イベントの実施② 運動系イベント	6
(1) 開催概要.....	6
(2) 参加者募集方法.....	7
(3) アンケート実施方法	8
(4) 当日の様子	8
4 ポイント集の制作	9
(1) 制作の目的	9
(2) 基本的な考え方.....	9
(3) ポイント集の対象	9
(4) 仕様	9
(5) 協力団体等	9
(6) 周知活動.....	9
(7) 納品物	10
5 アンケート結果	11
(1) 試行的イベント① アート系イベント	11
(2) 試行的イベント② 運動系イベント	19
6 考察	32
(1) 5つの成果指標から見た整理.....	32
(2) 試行的イベントの比較考察	33
(3) 各プログラム別の考察.....	34
(4) 交流レベル別の考察	36
(5) 総括	37

1 事業概要

(1) 事業の背景と目的

多様な人々が互いを認め合い、支え合いながら暮らす共生社会の実現に向けては、子どもの頃から多様性への理解を育むことが肝要である。特に、幼少期に自分と異なる立場や特性を持つ人と関わる経験は、他者への配慮や適切な支援行動を自然に身につける契機となる。

ところが現状は、障がい児と障がいのない児とは、教育環境や日常生活の場面が分かれることが多く、日常的な交流機会が十分に確保されているとは言い難い状況にある。

このような背景を踏まえ、本事業では、障がい児と障がいのない児が同じ場で活動し、交流を通じて相互理解を深める機会を創出(試行的イベントの企画・実施)するとともに、そこから得られた知見を整理し、今後より幅広く多くのイベントや地域活動等への障がい児の参加が促されるよう「インクルーシブイベントポイント集」を作成した。

併せて、趣向の異なる試行的イベントを比較実施することにより、子ども自身の気づき、成長、障がい理解、行動変容等、「交流機会による子どもへの効果」を期待するにはどのような形のイベントが効果的かの考察を行った。

(2) 訴求対象

本事業では、試行的イベントの参加対象を小学生とした。なぜなら、小学生は学年によって心理的な発達段階や他者理解の程度に幅があるものの、中高生に比して「心のバリア」の形成に至っていない学齢期であることから、介入により気づきや行動変容につながる変化をより期待できると考えたためである。

(3) 調査研究の設計

まず本事業では、イベントのどの設計要素が「交流機会による子どもへの効果」と高い相関性を有するのを探る目的で、比較検討が容易となる趣向を異にする2つの試行的イベントを企画した。

【試行的イベントの比較表】

比較項目	試行的イベント①	試行的イベント②
ジャンル	アート系	運動系
活動形態	自由参加型・個別制作中心	グループ活動型・協働中心
参加方法	事前申し込み不要(当日自由参加)	事前申し込み必要
保護者の関与	子ども+保護者も参加	子ども主体
アンケート	イベント事後アンケートのみ	イベント事前・事後アンケートを実施

さらに、上記アート系イベントおよび運動系イベントの双方に於いて、子ども同士の交流が生まれるポイントやその濃淡が異なるプログラムを複数用意し、どの設計要素が「交流の質」に影響を与えうるのを探ることとした。

次に、交流機会の評価にあたっては、以下の5つの評価指標を設定し、「交流機会による子どもへの効果」の多面的な評価に努めた。これにより、単に漠然とした参加満足度で評価する場合に比べ、より説得力を伴った考察の実現を目指した。

【5つの評価指標】

- ① 助け合いの機会の発生
- ② 笑顔や笑い声などのポジティブな反応
- ③ コミュニケーションの活性化
- ④ 多様性理解の向上
- ⑤ 行動変容の兆し

加えて、評価のビューポイントも、以下の2つの視点から評価することで、その客観性向上を図った。

【2つの評価ビューポイント】

- ① 運営側の視点(運営スタッフが、参加児童の行動を観察して評価)
- ② 参加者の視点(子どもの親御さんが、アンケート回答を通じて評価)

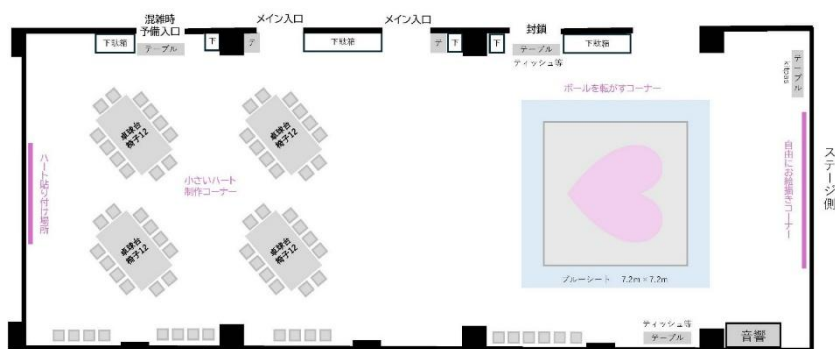
以上の事業設計により、どのようなポイントを押さえたイベントが「交流機会による子どもへの効果」を生み出すのに有効なのかを総合的に検証し、知見の整理を図ったうえで後掲「6 考察」に繋げた。

2 試行的イベントの実施① アート系イベント

(1) 開催概要

イベント名	ワイワイ描く ごちゃませずハート ～共感力を育むアート体験を～
日時	令和7年9月15日(月・祝)14時00分～16時00分(開場13時45分)
場所	中央区複合庁舎1階 中央区民センター 区民ホール (住所:中央区南3条西11丁目)
対象者	札幌市在住の小学生とその保護者
参加費用	無料
参加者数	約80名(子ども:約40名、大人:約40名)
プログラム	14:00 開会挨拶/進行方法の説明 14:05 アート制作開始 ・ボールを転がすコーナー ・自由にお絵かきコーナー ・マスキングテープコーナー 15:35 鑑賞会、写真撮影 15:55 閉会挨拶 16:00 終了
監修	西村 公一氏
協力団体	日本理化学工業株式会社(画材「キットパス」の提供)
実施体制	監修・講師:西村公一氏 司会進行:1名 有資格者:3名(看護師1名、作業療法士・保育士1名、介護福祉士1名) 運営スタッフ:4名

〈会場レイアウト図〉



(2) 参加者募集方法

① チラシ制作

A4 両面カラー 1,000 部

〈表面〉



〈裏面〉



② 募集方法

- ・チラシ配架(札幌市内 10 区の区民センター及び区役所等)
- ・北海道新聞 さっぽろ 10 区(トーク)掲載 9 月 12 日
- ・SNS 広告:令和 7 年 8 月 15 日~8 月 18 日、9 月 12 日 5 日間
- ・NPO 法人あえりあ の Instagram 投稿

③ 参加・申し込み方法

事前申し込み不要、当日参加可

※必要な画材数量を把握するため、参加人数についてのみ WEB フォームにより事前回答を求めた。

(3) アンケート実施方法

イベント終了後、参加者に対しアンケート回答用の二次元コードを掲載した用紙を配布し、オンラインでの回答を依頼した。(アンケート回答数 9件)

(4) 当日の様子

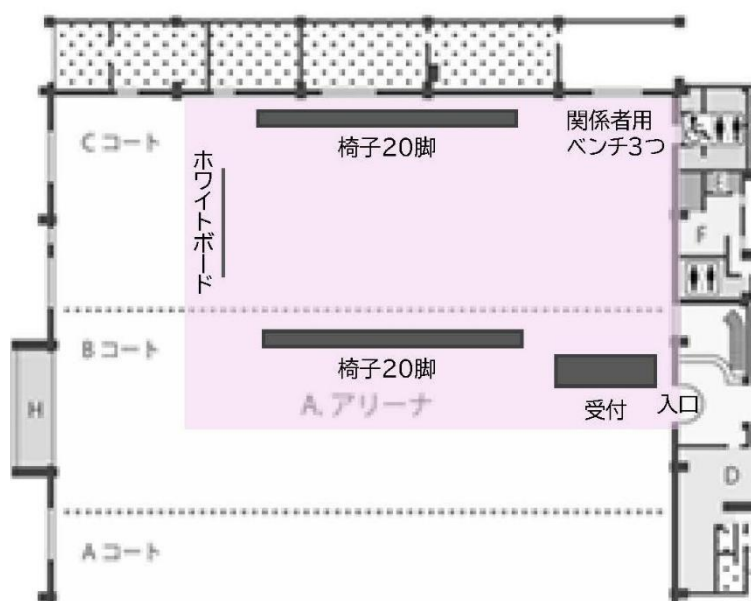


3 試行的イベントの実施② 運動系イベント

(1) 開催概要

イベント名	みんなでワイワイ♪ ふうせん&モルック大作戦
日時	令和7年10月19日(日) 10時00分~12時00分(開場9時45分)
場所	農試公園 屋内アリーナ (住所:西区八軒5条西6丁目95-21)
対象者	札幌市在住の小学生とその保護者
参加費用	無料
参加者数	43名(子ども:19名、大人24名)
プログラム	10:00 開会挨拶/理学療法士と一緒に準備体操 10:10 プログラムⅠ-ふうせんバレー 10:30 休憩 10:40 プログラムⅡ-モルック 11:30 農試公園のインクルーシブ遊具で遊ぼう! 12:00 終了
共催	公園緑化協会
実施体制	司会進行:1名 有資格者:3名(理学療法士2名、看護師1名) 運営スタッフ:5名

〈会場レイアウト図〉



(2) 参加者募集方法

① チラシ制作

A4 両面カラー 600 部

〈表面〉



〈裏面〉



② 募集方法

- ・チラシ配架(札幌市内 10 区の区民センター及び区役所等)
- ・SNS 広告:令和 7 年 9 月 30 日~10 月 10 日 11 日間
- ・NPO 法人あえりあ の Instagram 投稿

③ 参加・申し込み方法

WEB フォームからの事前申し込みとし、10 月 10 日(金)12 時 00 分に参加申し込みを締め切り、参加者にはメールにて連絡した。

(3) アンケート実施方法

参加者の意識変容および満足度の把握を目的として、参加前にオンラインによる事前アンケートを実施し、イベント終了後には事後アンケート用紙を配布のうえ、会場にて記入を依頼した。

(事前アンケート回答数 18 件、事後アンケート回答数 17 件)

(4) 当日の様子



4 ポイント集の制作

(1) 制作の目的

本事業で実施した試行的イベントを通じて得られた知見を整理し、今後、地域におけるイベントや学校外活動等において、障がいのある子どもとない子どもが共に参加できる交流機会の創出を促進することを目的としてポイント集を作成した。

また、実施主体の経験の有無にかかわらず活用できる資料とすることで、交流機会の裾野を広げることも目的とした。

(2) 基本的な考え方

本ポイント集は、具体的な手順や方法を示すマニュアルではなく、交流機会づくりにおいて重視すべき視点や姿勢を整理することを基本的な考え方とした。

試行的イベントの結果から、イベントの内容に応じてインクルーシブのあり方には多様な方法があり、障がい児とその保護者に対するサポートや配慮の方法も、相手により様々であることから、インクルーシブイベントの“やり方”ではなく“あり方”を示し、実施者自身が考え、取り入れやすい内容とした。

(3) ポイント集の対象

今後、地域におけるイベントや学校外活動等において、障がいのある子どもとない子どもが共に参加できる交流機会の創出を促進することを目的としてポイント集を作成した。

また、実施主体の経験の有無にかかわらず活用できる資料とすることで、交流機会の裾野を広げることも目的とした。

(4) 仕様

A5判 / 総12ページ(表紙・裏表紙を含む) / オールカラー

全ページに音声コード(Uni-Voice)を貼付し、切り欠きを2か所施した。

(5) 協力団体等

本ポイント集の制作にあたっては、以下の障がい児の保護者および関係団体の協力を得て、意見聴取や内容の検討を行った。当事者の視点を反映することで、より説得力を持った内容となるよう配慮した。

- ・一般社団法人 札幌市手をつなぐ育成会
- ・NPO 法人 札幌肢体不自由児者父母の会
- ・NPO 法人 あえりあ

(6) 周知活動

SNS 広告：令和8年3月13日～3月27日 15日間

(7) 納品物

切り欠き加工を施した 1,000 部を納品した。

〈表紙・裏表紙〉

〈P2-3〉



〈P4-5〉

〈P6-7〉



〈P8-9〉

〈P10-11〉



5 アンケート結果

(1) 試行的イベント① アート系イベント

① 調査方法

イベント終了後、参加者に対しアンケート回答用の二次元コードを掲載した用紙を配布し、オンラインでの回答を依頼した。

② 調査項目

- ・保護者の年代
- ・参加した子どもの学年
- ・イベントを何で知ったか
- ・参加しようと思ったきっかけ
- ・イベント中の子どもの様子について
- ・保護者が感じたこと
- ・今後の参加意欲
- ・子どもの障がいの有無
- ・誰もが参加しやすいイベントになっていたか

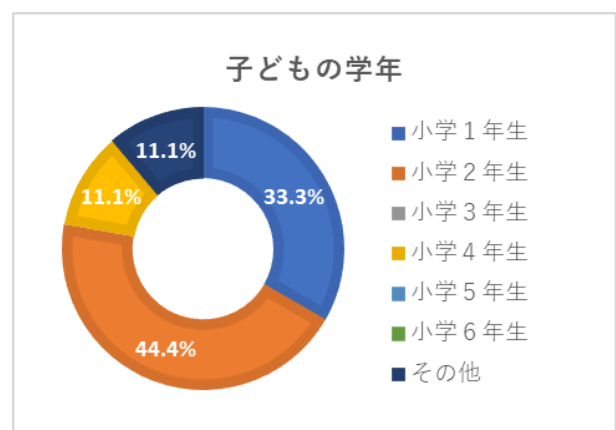
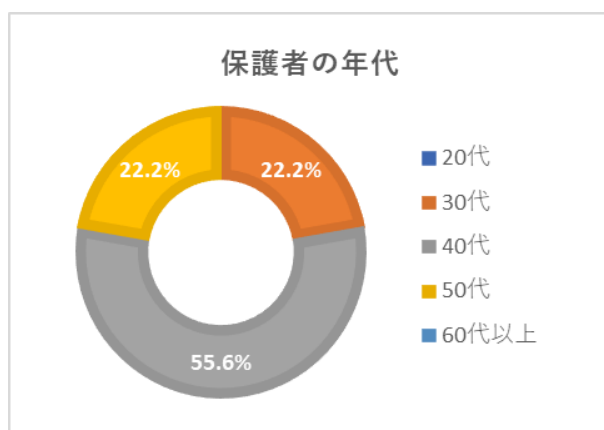
③ 調査結果

Q1. ご自身(保護者の方)の年代を回答してください。(n=9)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
回答数	0	2	5	2	0
構成比	0%	22.2%	55.6%	22.2%	0%

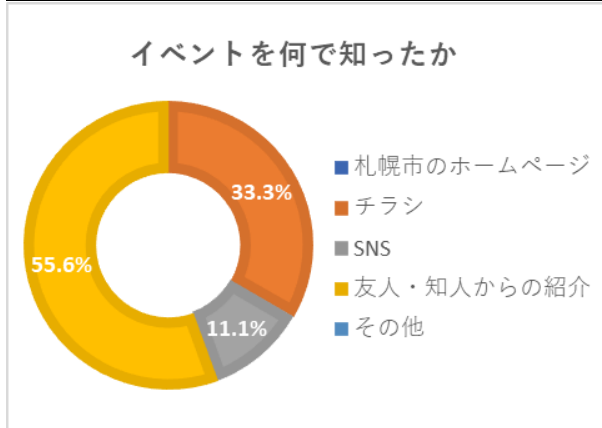
Q2. 参加されたお子さんの学年を回答してください。(n=9)

	小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生	その他
回答数	3	4	0	1	0	0	1
構成比	33.3%	44.4%	0%	11.1%	0%	0%	11.1%



Q3. 本イベントを何で知りましたか？ (n=9)

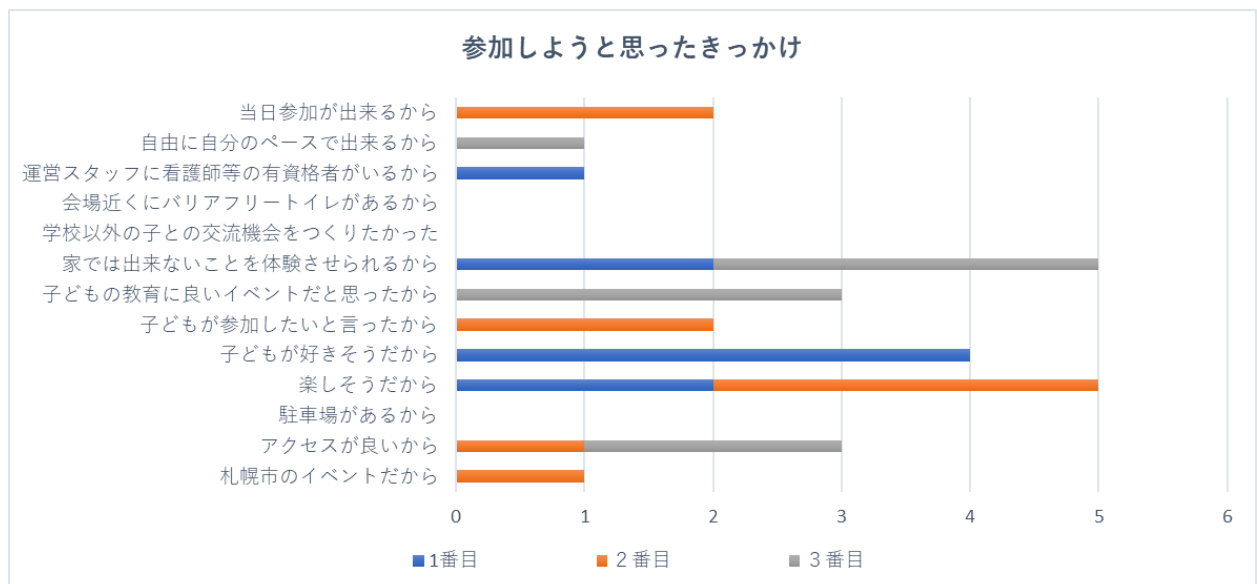
	札幌市の ホームページ	チラシ	SNS	友人・知人か らの紹介	その他
回答数	0	3	1	5	0
構成比	0%	33.3%	11.1%	55.6%	0%



Q4. 参加しようと思ったきっかけは何ですか？1 番目～3 番目に当てはまるものをそれぞれ回答してください。

(n=9)

選択項目	1番目		2番目		3番目	
	回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
札幌市のイベントだから	0	0%	1	11.1%	0	0%
アクセスが良いから	0	0%	1	11.1%	2	22.2%
駐車場があるから	0	0%	0	0%	0	0%
楽しそうだから	2	22.2%	3	33.3%	0	0%
子どもが好きそうだから	4	44.4%	0	0%	0	0%
子どもが参加したいと言ったから	0	0%	2	22.2%	0	0%
子どもの教育に良いイベントだと思ったから	0	0%	0	0%	3	33.3%
家ではできないことを体験させられるから	2	22.2%	0	0%	3	33.3%
学校以外の子との交流機会をつくりたかった	0	0%	0	0%	0	0%
会場近くにバリアフリートイレがあるから	0	0%	0	0%	0	0%
運営スタッフに看護師等の有資格者がいるから	1	11.1%	0	0%	0	0%
自由に自分のペースで出来るから	0	0%	0	0%	1	11.1%
当日参加が出来るから	0	0%	2	22.2%	0	0%



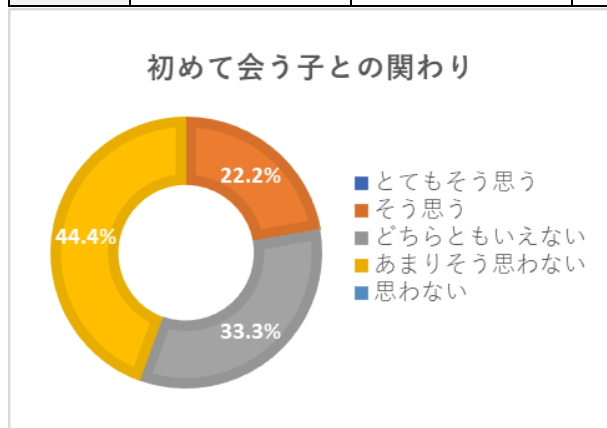
イベント中のお子さんの様子について、普段と比較したときの変化をご回答ください。

Q5. 初めて会う子ども、普段よりも自然に関わっているように見えましたか？

【社交性・協調性の変化】

(n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	0	2	3	4	0
構成比	0%	22.2%	33.3%	44.4%	0%

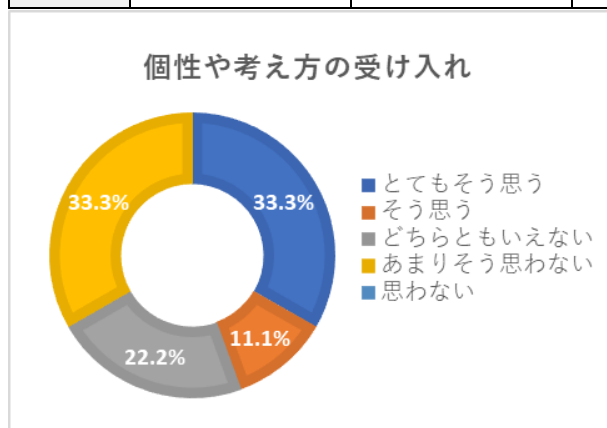


Q6. 自分とは違う子の個性や考え方、やり方を普段よりも受け入れていましたか？

【多様性の受容姿勢の変化】

(n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	3	1	2	3	0
構成比	33.3%	11.1%	22.2%	33.3%	0%

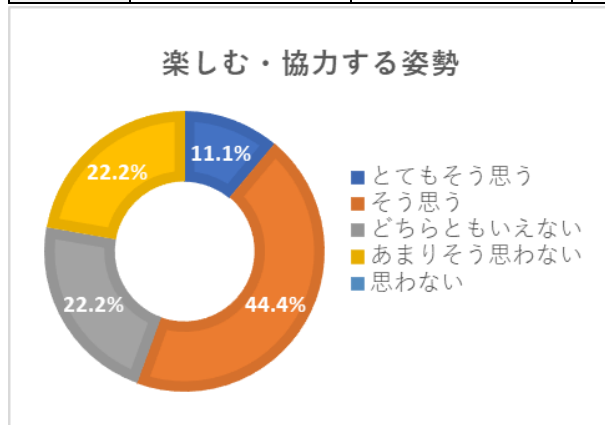


Q7. 他の子といっしょに楽しもう、協力しようという気持ちが普段よりも多く見られましたか？

【協働性・共感性の変化】

(n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	1	4	2	2	0
構成比	11.1%	44.4%	22.2%	22.2%	0%

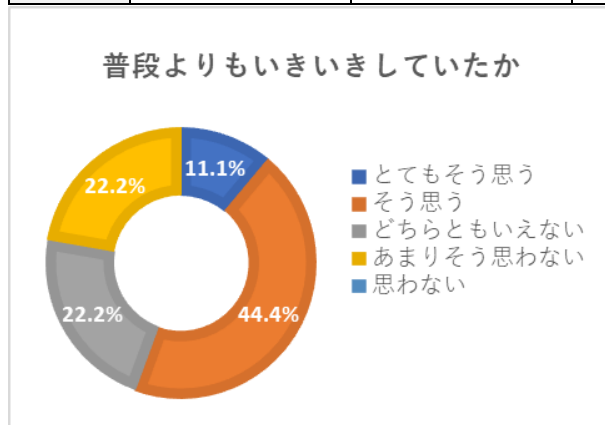


Q8. イベント中のお子さんの表情や様子は、普段よりもいきいきしていたと感じますか？

【安心感・自己肯定感の変化】

(n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	1	4	2	2	0
構成比	11.1%	44.4%	22.2%	22.2%	0%



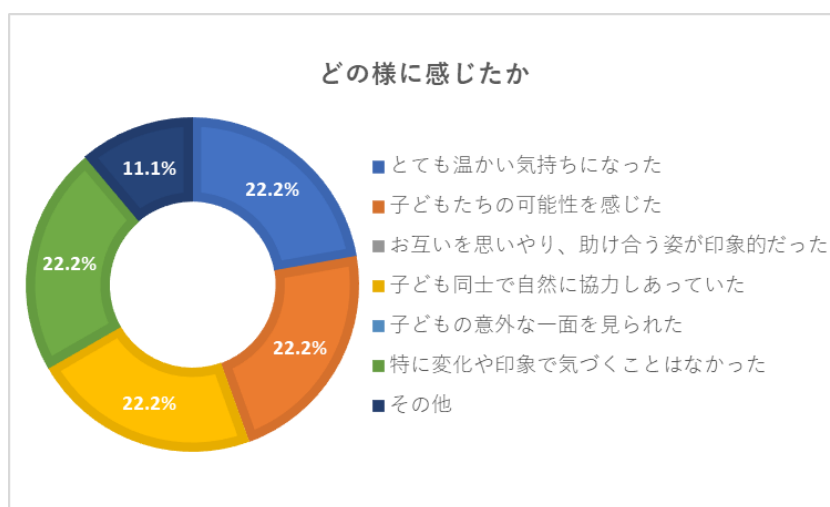
ご自身(保護者の方)が感じたことをお聞かせください。

Q9. 子ども同士が協力する様子を見て、どのように感じましたか？

(n=9)

	とても温かい気持ちになった	子どもたちの可能性を感じた	お互いを思いやり、助け合う姿が印象的だった	子ども同士で自然に協力しあっていた	子どもの意外な一面を見られた	特に変化や印象で気づくことはなかった	その他
回答数	2	2	0	2	0	2	1
構成比	22.2%	22.2%	0%	22.2%	0%	22.2%	11.1%

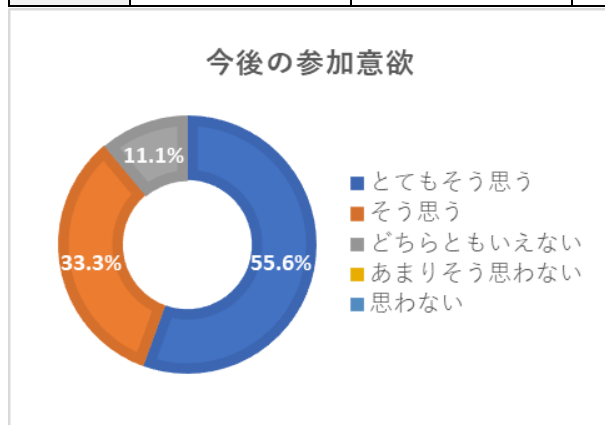
※その他の回答内容:「あまり関りがなく」



Q10. このようなイベントに、今後も参加したい・参加させたいと感じましたか？

(n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	思わない
回答数	5	3	1	0	0
構成比	55.6%	33.3%	11.1%	0%	0%

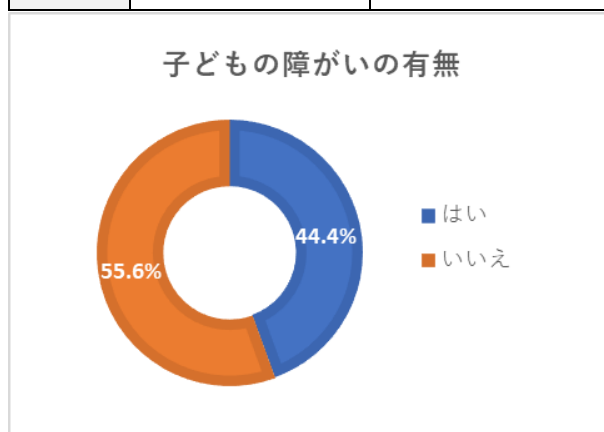


Q11. そのように回答した理由をお聞かせください。

1	普段家ではあまりできないことをすることができたから。ただし、他の子との交流をしなくともできる活動ではあったので、きょうだいで参加したこともあり、あまり他の子との交流はなかった。
2	障がいの特性を知ってくれている方がいないと、なかなか外に出ることができないから
3	普段あまりできないことをやることで、刺激を受けられる
4	最初は子供の機嫌が悪かったが、強要せずに途中参加もしやすかったので、徐々にやる気になり楽しめた。
5	感受性を育てたい

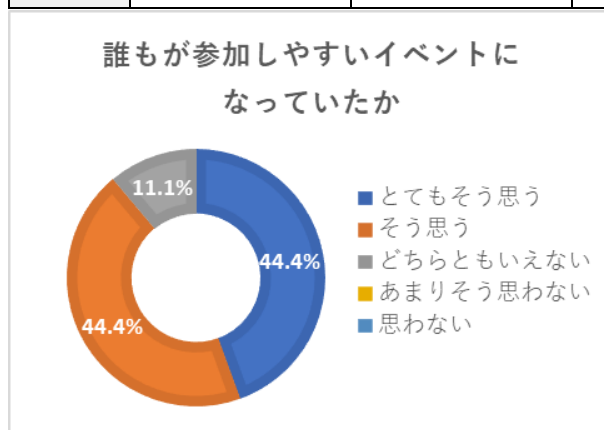
Q12. お子さんに、障がいや、なにか配慮が必要な場面はありますか？ (n=9)

	はい	いいえ
回答数	4	5
構成比	44.4%	55.6%



Q13. 誰もが参加しやすいイベントになっていたと思いますか？ (n=9)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	4	4	1	0	0
構成比	44.4%	44.4%	11.1%	0%	0%



Q14. 誰もが参加しやすいイベントを実施するためには、どのようなことが必要だと思いますか？
どんなことでも自由にお書きください。

1	広報の媒体を増やす
2	若干のタイムスケジュールがあることがやりずらさになってた感じはした
3	アクセス、記載内容、運営体制

(2) 試行的イベント② 運動系イベント

① 調査方法

参加者の意識変容および満足度の把握を目的として、参加前にオンラインによる事前アンケートを実施し、イベント終了後には事後アンケート用紙を配布のうえ、会場にて記入を依頼した。

② 調査項目

事前アンケート	事後アンケート
・保護者の年代	・保護者の年代
・参加した子どもの学年	・参加した子どもの学年
・イベントを何で知ったか	
・参加しようと思ったきっかけ	
・普段の子どもの様子について	・イベント中の子どもの様子について
	・保護者が感じたこと
	・今後の参加意欲
	・子どもの障がいの有無
	・誰もが参加しやすいイベントになっていたか

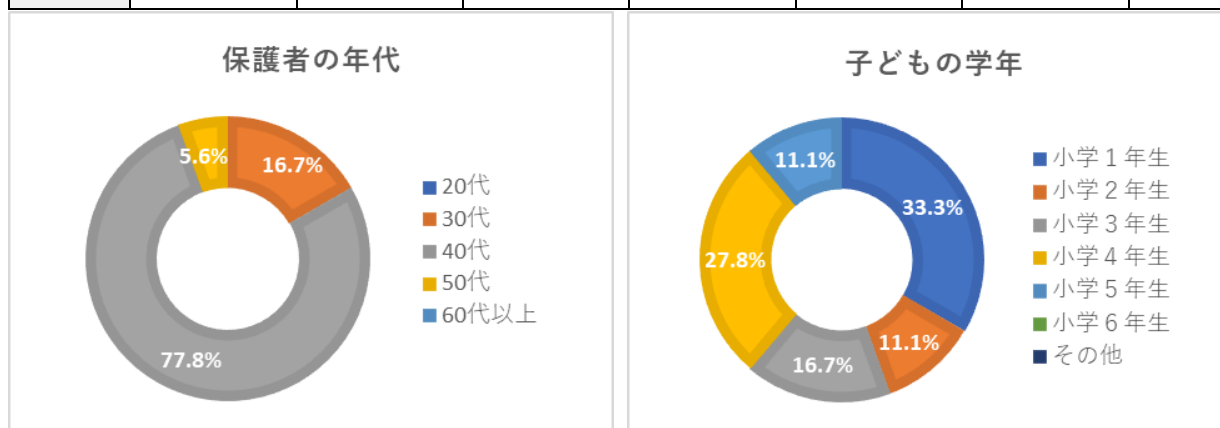
③ 調査結果(事前アンケート)

Q1. ご自身(保護者の方)の年代を回答してください。(n=18)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
回答数	0	3	14	1	0
構成比	0%	16.7%	77.8%	5.6%	0%

Q2. 参加されたお子さんの学年を回答してください。(n=18)

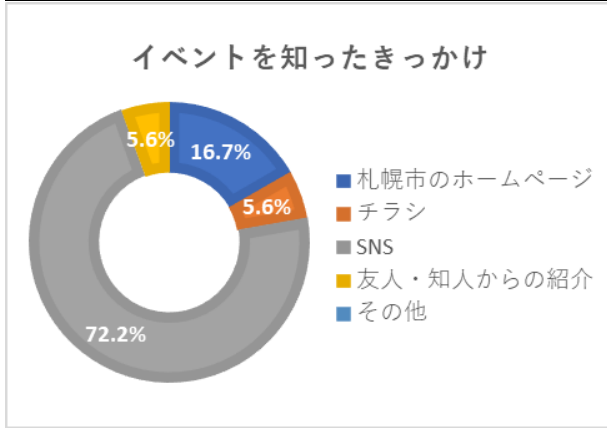
	小学1年生	小学2年生	小学3年生	小学4年生	小学5年生	小学6年生	その他
回答数	6	2	3	5	2	0	0
構成比	33.3%	11.1%	16.7%	27.8%	11.1%	0%	0%



Q3. 本イベントを何で知りましたか？

(n=18)

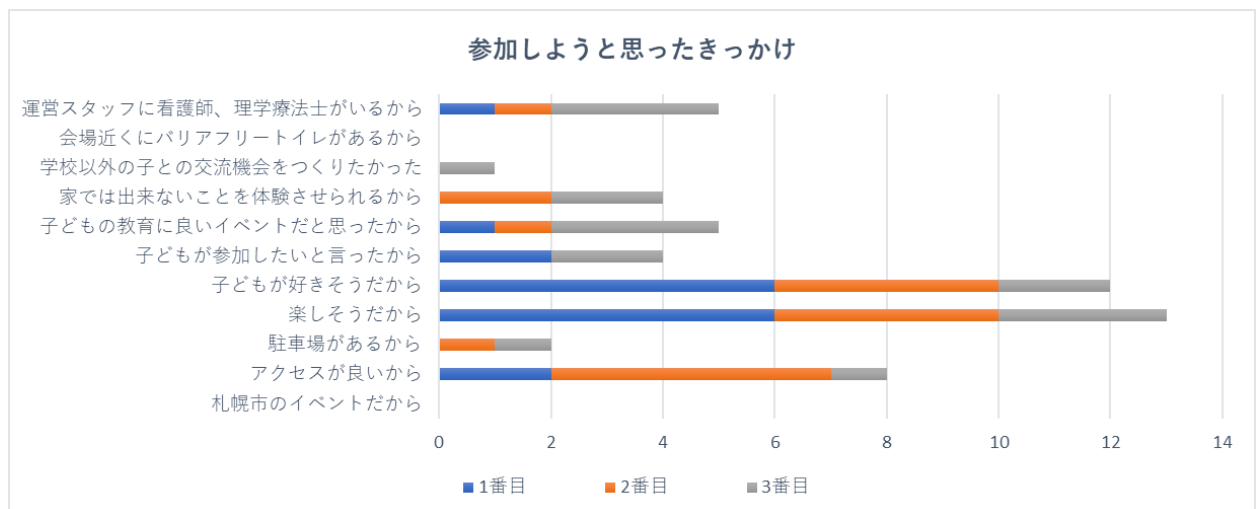
	札幌市の ホームページ	チラシ	SNS	友人・知人か らの紹介	その他
回答数	3	1	13	1	0
構成比	16.7%	5.6%	72.2%	5.6%	0%



Q4. 参加しようと思ったきっかけは何ですか？1 番目～3 番目に当てはまるものをそれぞれ回答してください。

(n=18)

選択項目	1番目		2番目		3番目	
	回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
札幌市のイベントだから	0	0%	0	0%	0	0%
アクセスが良いから	2	11.1%	5	27.8%	1	5.6%
駐車場があるから	0	0%	1	5.6%	1	5.6%
楽しそうだから	6	33.3%	4	22.2%	3	16.7%
子どもが好きそうだから	6	33.3%	4	22.2%	2	11.1%
子どもが参加したいと言ったから	2	11.1%	0	0%	2	11.1%
子どもの教育に良いイベントだと思ったから	1	5.6%	1	5.6%	3	16.7%
家ではできないことを体験させられるから	0	0%	2	11.1%	2	11.1%
学校以外の子との交流機会をつくりたかった	0	0%	0	0%	1	5.6%
会場近くにバリアフリートイレがあるから	0	0%	0	0%	0	0%
運営スタッフに看護師、理学療法士がいるから	1	5.6%	1	5.6%	3	16.7%



お子さんの普段の様子についてお答えください。

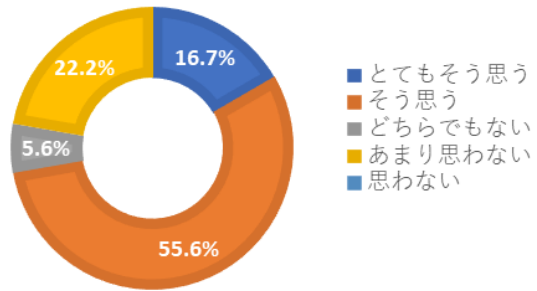
Q5. 初めて会う子とも自然に関わっていますか？

【社交性・協調性】

(n=18)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	3	10	1	4	0
構成比	16.7%	55.6%	5.6%	22.2%	0%

初めて会う子との関わり



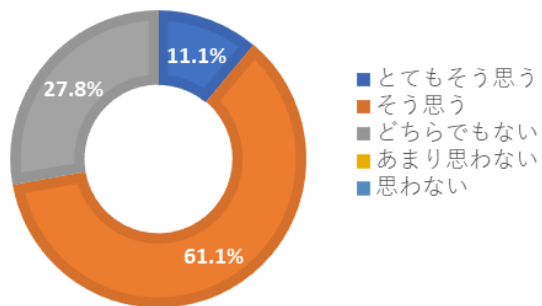
Q6. 自分とは違う子の個性や考え方、やり方を受け入れていますか？

【多様性の受容姿勢】

(n=18)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	2	11	5	0	0
構成比	11.1%	61.1%	27.8%	0%	0%

個性や考え方の受け入れ

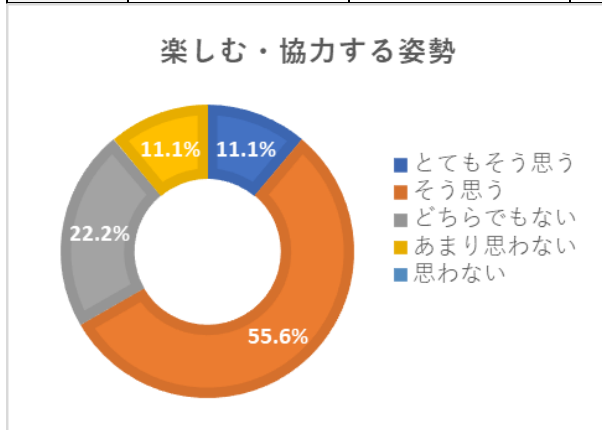


Q7. 他の子といっしょに楽しもう・協力しようという気持ちは見られますか？

【協働性・共感性】

(n=18)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	2	10	4	2	0
構成比	11.1%	55.6%	22.2%	11.1%	0%



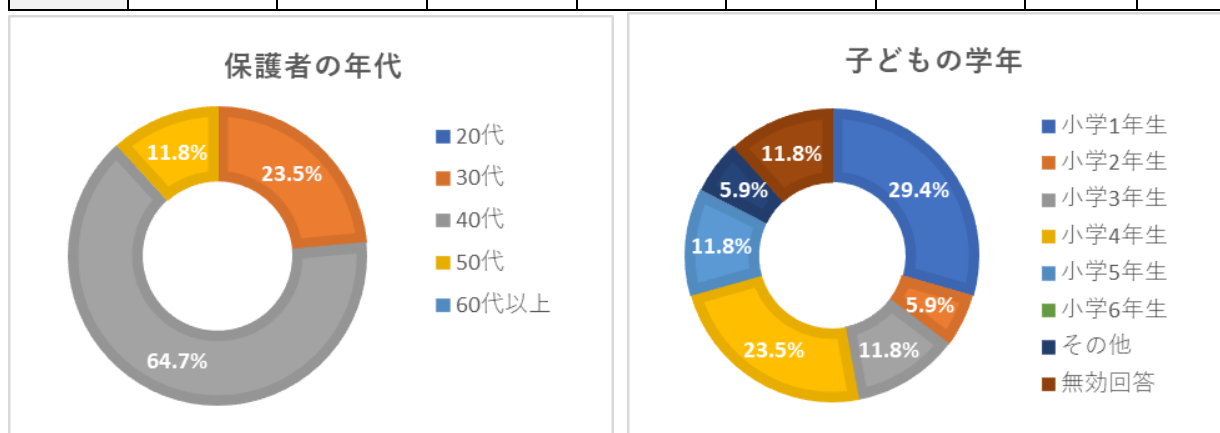
④ 調査結果(事後アンケート)

Q1. ご自身(保護者の方)の年代を回答してください。(n=17)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
回答数	0	4	11	2	0
構成比	0%	23.5%	64.7%	11.8%	0%

Q2. 参加されたお子さんの学年を回答してください。(n=17)

	小学 1年生	小学 2年生	小学 3年生	小学 4年生	小学 5年生	小学 6年生	その他	無効 回答
回答数	5	1	2	4	2	0	1	2
構成比	29.4%	5.9%	11.8%	23.5%	11.8%	0%	5.9%	11.8%



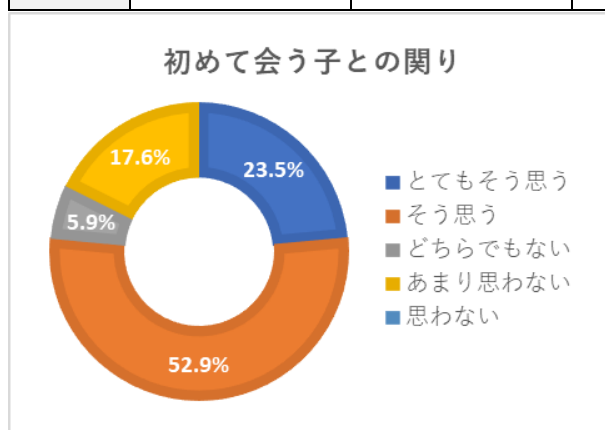
イベント中のお子さんの様子についてお答えください。

Q3. 初めて会う子ども、自然に関わっているように見えましたか？

【社交性・協調性の変化】

(n=17)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	4	9	1	3	0
構成比	23.5%	52.9%	5.9%	17.6%	0%

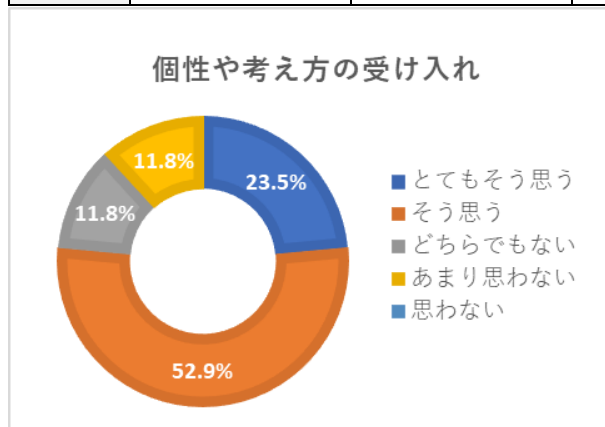


Q4. 自分とは違う子の個性や考え方、やり方を受け入れていましたか？

【多様性の受容姿勢の変化】

(n=17)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	4	9	2	2	0
構成比	23.5%	52.9%	11.8%	11.8%	0%

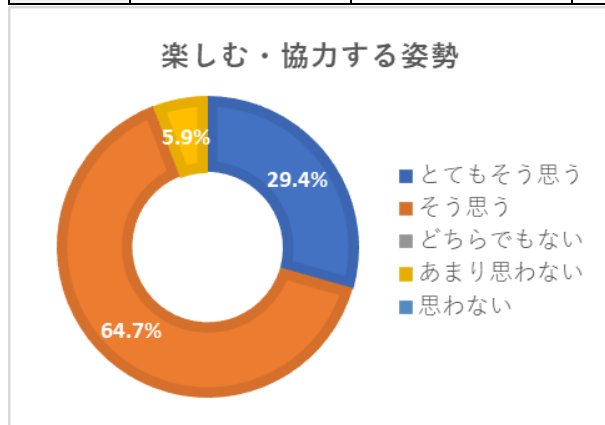


Q5. 他の子といっしょに楽しもう・協力しようという気持ちが見られましたか？

【協働性・共感性の変化】

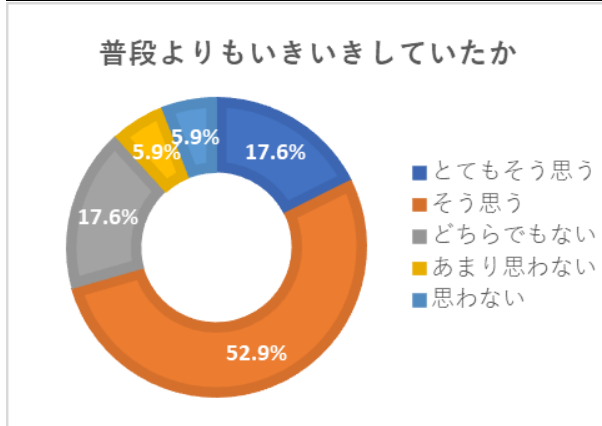
(n=17)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	5	11	0	1	0
構成比	29.4%	64.7%	0%	5.9%	0%



Q6. イベント中のお子さんの表情や様子は、普段よりも、いきいきしていたと感じますか？ (n=17)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	3	9	3	1	1
構成比	17.6%	52.9%	17.6%	5.9%	5.9%

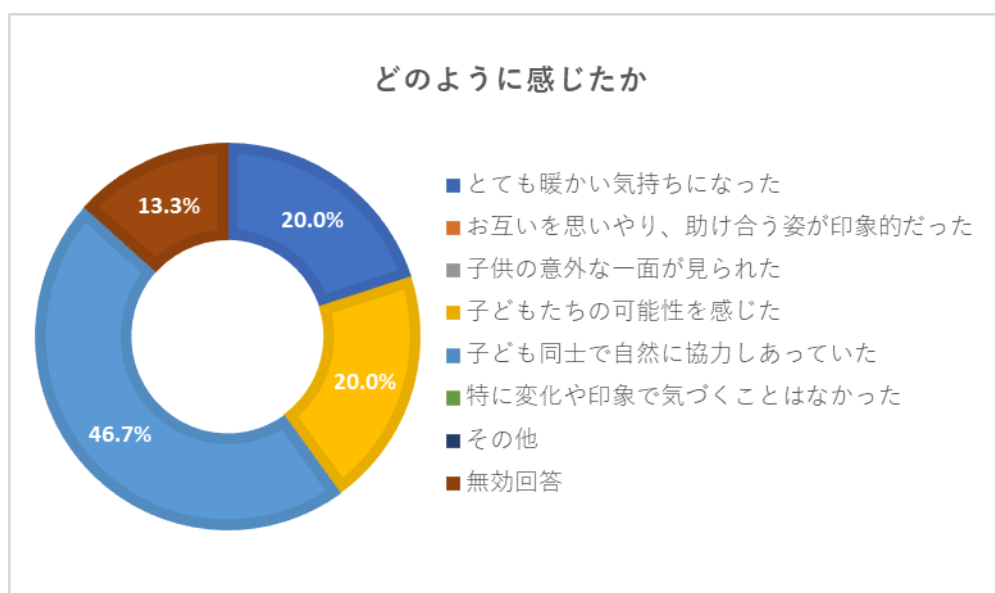


ご自身(保護者の方)が感じたことをお聞かせください。

Q7. 子ども同士が協力する様子を見て、どのように感じましたか？

(n=15)

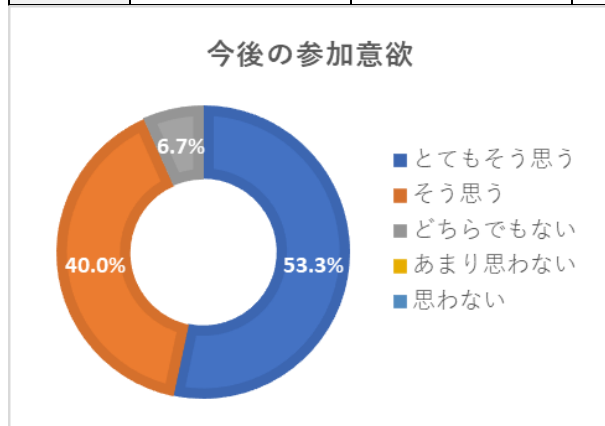
	とても温かい気持ちになった	お互いを思いやり、助け合う姿が印象的だった	子どもの意外な一面が見られた	子どもたちの可能性を感じた	子ども同士で自然に協力しあっていた	特に変化や印象で気づくことはなかった	その他	無効回答
回答数	3	0	0	3	7	0	0	2
構成比	20.0%	0%	0%	20.0%	46.7%	0%	0%	13.3%



Q8. このようなイベントに、今後も参加したい・参加させたいと感じましたか？

(n=15)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	8	6	1	0	0
構成比	53.3%	40.0%	6.7%	0%	0%

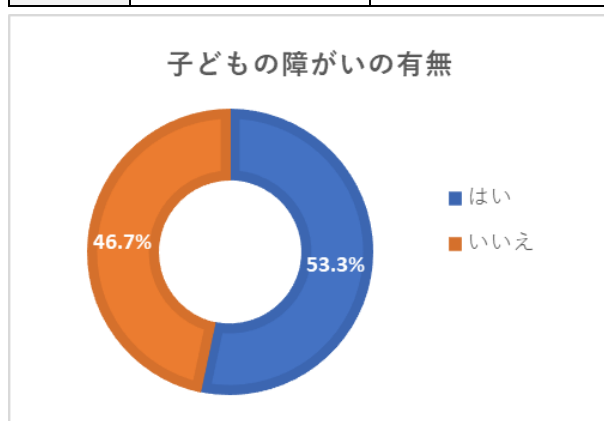


Q9. そのように回答した理由をお聞かせください。

1	年齢などで区別された健常児向けのイベントには参加が難しく(本人の理解度や参加のしやすさ、親のメンタルなど)配慮してくれるスタッフが多いイベントだと安心して参加させられるので
2	とても楽しそうにスポーツできていたので
3	手拍子の人数に分かれるゲームはおもしろいと思いました。
4	子どもが楽しんでしたので次回は他の人も誘って参加したい。
5	様々な人とふれあう場としてよいと思った。
6	楽しそうだったので
7	色々な体験をさせたいから。
8	初めてこのようなイベントに参加するため、とても緊張している様子でしたが、あそびを通してどんどん色々なお子さんとコミュニケーションをとっている姿を見て嬉しく思いました。なかなか学校以外の子とあそぶ機会がないため、自然と子どもたちと関わっている我が子を見ることができて良かったです。チームに分かれており、小グループでやりとりできるのも良かったと思います。
9	子どもたちが楽しそうにいきいきしていたから。モルックを通して初めて会ったことも垣根をこえて楽しそうに集えていたから
10	学年関係なくもりあがる
11	少し人見知りのところがあるので、初めて会う子と協力して遊べる様になればよいと思いました。
12	様々な子どもと接することができるため
13	いつも体験出来ないモルックに参加できるので。家で遊びがちなので、このような機会があると外遊びをしたり他の子供との交流ができるので、とてもいい経験になるので。
14	子供も大人も楽しかったからです

Q10. お子さんに、障がいや、なにか配慮が必要な場面はありますか？ (n=15)

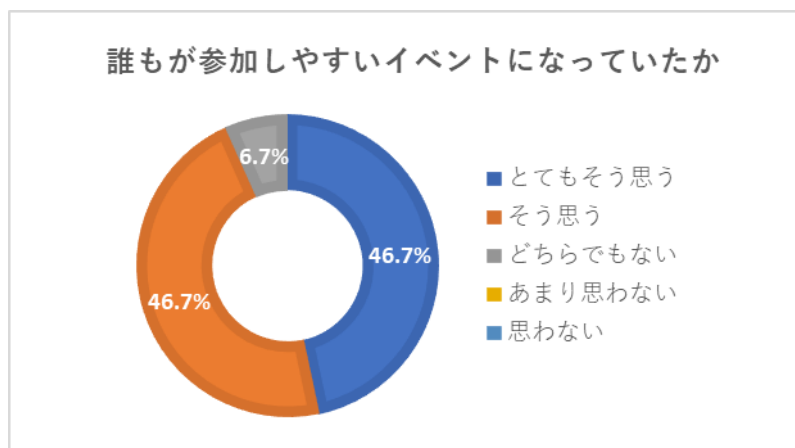
	はい	いいえ
回答数	8	7
構成比	53.3%	46.7%



Q11. 誰もが参加しやすいイベントになっていたと思いますか？

(n=15)

	とてもそう思う	そう思う	どちらとも いけない	あまりそう 思わない	思わない
回答数	7	7	1	0	0
構成比	46.7%	46.7%	6.7%	0%	0%



Q12. 誰もが参加しやすいイベントを実施するためには、どのようなことが必要だと思いますか？

どんなことでも自由にお書き下さい。

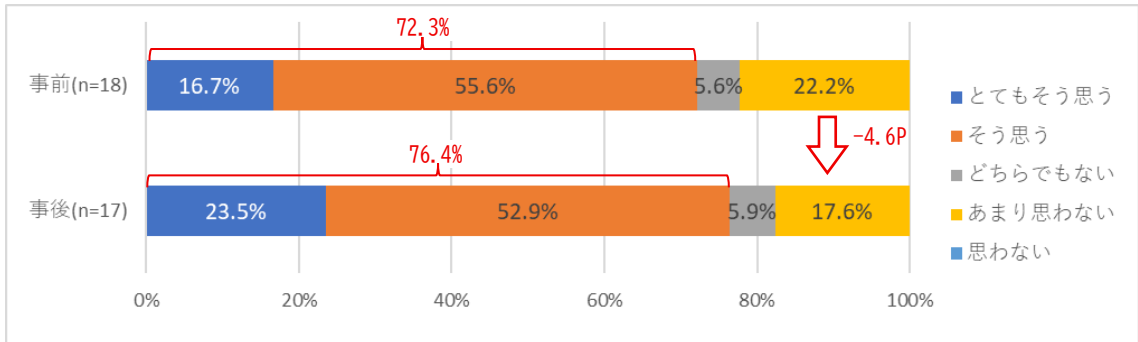
1	配慮をしてくれるスタッフの充実
2	今日の会の開催ありがとうございました。一つ気になったのは、新しいルールを自由にきめて下さいと子供たちになげかけていましたが、時間制限もあり、むずかしそうでした。結局中途半端なかたちでまとまったのかなあという印象でやり方をもう少し工夫できたら良かったなと思いました。ありがとうございました。
3	理学療法士や看護師さんがいてくれるのは障がいある子どもの親として参加しやすいと感じました。スタッフの方が多く安心して参加できました。
4	たまたま SNS に流れてきてこのイベントを知りました。地域の学校や支援学校へのアナウンスがあっても良いと思いました。主催が PT さんということもあり、気になって応募しました。リハ職が主催にまわるイベントがおもしろかったです。
5	わかりやすいルール
6	スタッフの方が補助したり、ハンデを与えたりしてみんなが楽しめるイベントになっていたと思います。このままでいいと思います。
7	チームごとの人数は同一になった方がまわっている回数が同じになって良いと思います。

⑤ 「試行的イベント②運動系イベント」の事前・事後アンケートの比較

【社交性・協調性の変化】

事前:Q5. 初めて会う子ども自然に関わっていますか？

事後:Q3. 初めて会う子ども、自然に関わっているように見えましたか？



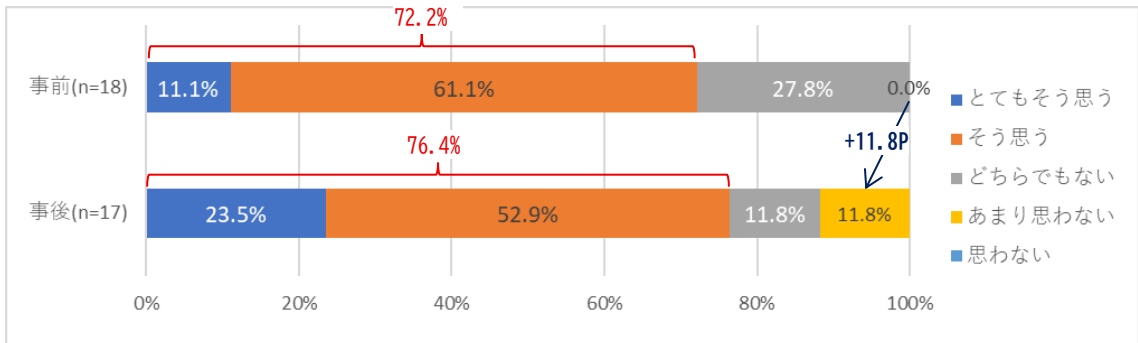
●社交性・協調性について、事前と事後で比較すると、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した保護者の合計が 4.1 ポイント上昇した。

●「あまり思わない」と回答した保護者は、事後に 4.6 ポイント減少した。

【多様性の受容姿勢の変化】

事前:Q6. 自分とは違う子の個性や考え方、やり方を受け入れていますか？

事後:Q4. 自分とは違う子の個性や考え方、やり方を受け入れていましたか？



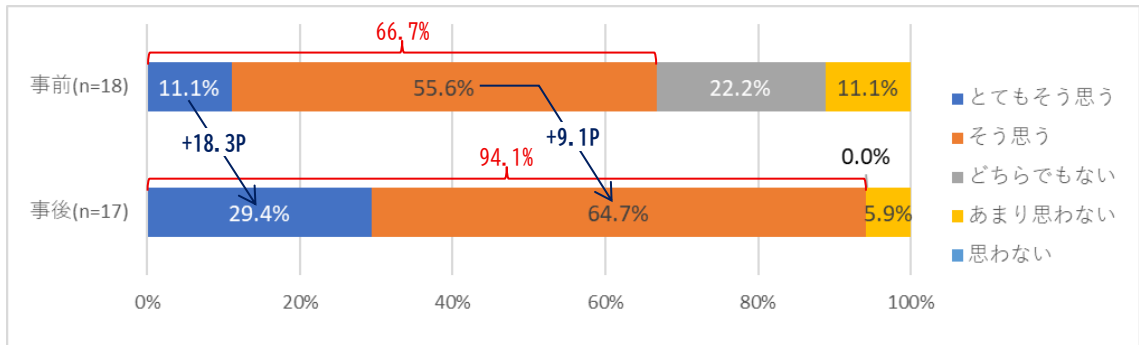
●多様性の受容姿勢について、事前と事後で比較すると、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した保護者の合計が 4.2 ポイント上昇した。

●事後アンケートで「あまり思わない」と回答した保護者が 11.8 ポイント増加した事象が特徴的である。

【協働性・共感性の変化】

事前:Q7. 他の子といっしょに楽しもう・協力しようという気持ちは見られますか？

事後:Q5. 他の子といっしょに楽しもう・協力しようという気持ちが見られましたか？



- 協働性・共感性について、事前と事後で比較すると、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した保護者の合計が、27.4ポイント増加している点が特徴的である。

6 考察

(1) 5つの成果指標から見た整理

本事業では、交流機会の評価にあたり、以下の5つの成果指標を設定した。試行的イベントの結果をこの視点から整理すると、活動形態により「交流機会による子どもへの効果」の現れ方に違いが見られた。

【5つの成果指標】

- ① 助け合いの機会の発生
- ② 笑顔や笑い声などのポジティブな反応
- ③ コミュニケーションの活性化
- ④ 多様性理解の向上
- ⑤ 行動変容の兆し

協働的な活動を中心とした試行的イベント②運動系イベントでは、助け合い行動やコミュニケーションの活性化が顕著に見られ、行動変容の兆しもその場で確認された。また、プログラムの進行に伴い、配慮行動が増加するなど、多様性理解の向上につながる行動も確認された。

一方、試行的イベント①アート系イベントでは、助け合い行動やコミュニケーションの発生は限定的であったが、笑顔や安心した様子などのポジティブな反応が多く見られ、同じ空間を共有する中で多様な子どもが共存する状況が形成された。こうした経験は、直接的な交流に至らなくとも、多様性理解の基盤となる可能性があると考えられる。

このように、5つの成果指標による評価は、プログラム内容や交流の程度により、成果の現れ方は一様ではなく、多様な形で表れることが確認された。したがって、交流機会の評価においては、単一の指標のみで判断するのではなく、複数の視点から総合的に捉えることが重要であると考えられる。

(2) 試行的イベントの比較考察

本事業では、交流のあり方や運営方法の違いが交流の質に与える影響を検証するため、アート系イベントと運動系イベントの2種類の試行的イベントを実施した。両イベントはプログラムの違いに加え、活動形態、参加方法、保護者の関与、アンケート実施方法の条件を意図的に変えて設計した。

その結果、交流の発生状況や行動変容の現れ方に明確な傾向の違いが見られた。

比較項目	試行的イベント①	試行的イベント②	考察
ジャンル	アート系	運動系	イベントの性質により子ども同士の関わり方が異なり、アート系では個別行動が多かったのに対し、運動系では共通の目的を目指したことで、子ども同士の関係構築が促進された
活動形態	自由参加型 個別制作中心	グループ活動型 協働中心	協働課題があることで声掛けや役割分担が生まれ、助け合い行動が発生しやすかった
参加方法	事前申し込み不要(当日自由参加)	事前申し込み必要	当日参加型は参加しやすい一方、入れ替わりが多く関係構築が限定的となり、事前申込型は参加者が固定され交流が深まる状況が見られた
保護者の関与	子ども+保護者も参加	子ども主体	保護者が関与する場面では親子単位での活動となりやすく、子ども主体の活動では、子ども同士の直接的な交流が増加した
アンケート	イベント事後アンケートのみ	イベント事前・事後アンケートを実施	事前・事後比較により配慮意識や関わり方の変化を把握でき、交流効果の検証が明確となった

① 交流の発生状況の違い

アート系イベントでは、同じ空間を共有する中で緩やかな関わりは見られたものの、子ども同士の直接的な交流は限定的であった。一方、運動系イベントでは、グループ活動や協働課題により、助け合いや声掛け等の交流が自然に発生し、コミュニケーションが活発化した。

このことから、交流の質を高めるためには、グループ活動や協働的な活動設計が有効である。

② 行動変容の現れ方の違い

運動系イベントでは、プログラムの進行に伴い配慮行動や支援行動が増加するなど、その場での行動変容が確認された。一方、アート系イベントでは、明確な行動変容は限定的であったが、障がいのある子どもと同じ空間で過ごす経験そのものが、イベント参加後の意識形成に影響を与えたと考えられる。

③ 保護者の関与の影響

アート系イベントでは保護者の参加自由としたため、保護者と子ども単位での活動となる場面が多く、子ども同士の関わりが生まれにくい傾向があった。一方、運動系イベントでは子ども主体の活動としたことで、子ども同士の直接的なコミュニケーションが促進された。

このことから、子ども同士の交流を促すためには、子ども主体の活動設計が有効であると考えられる。

(3) 各プログラム別の考察

① 交流の発生要因

	プログラム及びコーナー	交流が生まれた要因
アート系	ボールを転がすコーナー	ボールの共有を通じて、他の子どもにボールを渡す、順番を譲るなどの行動が見られた
	自由にお絵かきコーナー	他の子どもが描いた絵に対する関心から自然な交流が生まれた
	マスキングテープコーナー	同じテーブル内で制作方法を教えあう、テープを譲り合う行動が見られた
運動系	ふうせんバレー	声を掛け合いながら風船を繋ぐ必要があり、自然なコミュニケーションが発生していた
	モルック	グループ内で作戦を話し合う場面や応援の掛け声から会話が增え、子ども同士が自発的に役割分担を話し合う場面も見られた

② 活動特性による違い

活動タイプ	プログラム及びコーナー	交流状況
個別活動	マスキングテープコーナー	交流は限定的
共同制作活動	自由にお絵かきコーナー ボールを転がすコーナー	緩やかな交流が発生
共有物がある活動	ボールを転がすコーナー ふうせんバレー	最も自然な交流が発生
チーム戦及びグループ活動	モルック	協働行動が発生

③ 時間経過による子どもたちの変化

ア 試行的イベント①アート系イベント『ボールを転がすコーナー』

開始直後は、子ども同士の関わりは少なく、それぞれが様子を見ながら参加する状況が見られた。時間の経過とともに、ボールを共有する動きが増え、順番を譲る、渡すなどの関わりが自然に生まれた。また、周囲の子どもが他の子どもの行動に反応し拍手するなど、集団としての一体感が形成されていった。

共有物であるボールをきっかけに、短時間でも自然な関わりが増加することが分かった。

イ 試行的イベント①アート系イベント『自由にお絵かきコーナー』

開始時は個別に制作する様子が中心であったが、時間の経過とともに、ボールを転がすコーナーから移動した子どもが手形や足形で描き、近くの子どもの作品に関心を示す様子が見られた。ただし、交流は緩やかなものにとどまった。

ウ 試行的イベント①アート系イベント『マスキングテープコーナー』

開始時は親子単位での制作が中心であり、子ども同士の関わりはほとんど見られなかった。時間の経過により、他児の作品を見て模倣する様子や材料のやり取りが一部見られたが、交流は限定的であった。

時間経過による変化は小さく、個別制作型の特徴が顕著であった。

エ 試行的イベント②運動系イベント『ふうせんバレー』

開始直後は緊張した様子が見られ、声掛けは少なかった。活動が進むにつれ、「落とさないようにする」という共通目的のもとで声掛けが増加し、低学年児童への配慮や優しいパスなどの行動が見られるようになった。後半にはチームとしての一体感が生まれ、積極的なコミュニケーションが行われた。

オ 試行的イベント②運動系イベント『モルック』

開始時はルール理解に意識が向き、子ども同士の関わりは限定的であった。ゲームが進むにつれて、順番を教える、応援する、作戦を話し合うなどの関わりが生まれた。後半には、障がいのある児童や低学年の児童に対して投げる距離を配慮するなど、子ども同士の自発的な支援行動が見られた。

グループで活動したモルックではスタッフ主導から子ども主体の支援行動へ変化が見られた。

このことから、以下の結論に至った。

- 共有物がある活動は交流が生まれやすい
- 個別制作型は交流促進の仕掛けが必要
- チーム戦は相互理解に有効
- 時間経過により配慮行動が自然に生まれる

試行的イベントの比較考察及び各プログラム別の考察では、活動形態や運営方法の違いにより、子ども同士の交流の生まれ方に差があることが確認された。特に、共有物の存在や協働課題、グループ活動などの要素を取り入れることで、助け合いやコミュニケーションが促進され、行動変容が生まれやすいことが明らかとなった。

一方で、個別制作型の活動や自由参加型の形式では、子ども同士の関わりは限定的であったものの、障がいのある子どもとない子どもが同じ空間で過ごす経験自体に意義があり、互いの存在を自然に受け入れる機会となる可能性が確認された。

また、密な交流を促す活動は、事前準備や運営体制の構築など実施の負担が大きくなる傾向があるのに対し、交流の程度が緩やかな活動は、地域において実施しやすく、継続的に機会を提供しやすい特徴がある。共生社会の実現に向けては、短期的に効果が可視化される取組だけでなく、日常的に多様な子どもが同じ空間を共有する機会を積み重ねていくことも重要であると考えられる。

このように、交流のあり方には複数の段階があり、それぞれに異なる意義と役割があることから、イベント内容や実施環境に応じて適切な方法を選択する視点が必要である。これらの特徴を整理し、交流のあり方の違いを比較すると、次のとおりである。

(4) 交流レベル別の考察

試行的イベントの考察および各プログラムの考察から、子ども同士の交流の発生状況は活動形式や運営方法により異なり、交流の量や質には段階があることが確認された。必ずしも直接的な交流が多い形式が有効であるとは限らず、同じ空間を共有するだけでも実施する意義があると考えられる。

また、交流のレベルが高い活動では助け合いやコミュニケーションの活性化などの成果がその場で確認されやすい一方、事前準備や運営体制の構築が必要となり、実施のハードルが高くなる傾向が見られた。これに対し、交流レベルが低い活動は直接的な交流は限定的であるものの、実施しやすく、参加の間口を広げる効果があると考えられる。

このように、交流レベルにはそれぞれ特徴があり、どの形式にも意義があることから、目的や実施環境に応じて適切な交流レベルを選択する視点が重要であると考えられる。これらの特徴を整理すると、以下のとおりである。

【交流レベル別の整理】

区分	交流レベル		
	低い	中間	高い
活動形式	自由参加・個別活動	共有活動あり	グループ活動・協働型
交流の特徴	同じ空間を共有	自然発生的な関わりが生まれる	グループ活動による明確な協働・対話が生まれる
可視化される成果	少ない	一部見られる	明確に現れる
運営準備負担	低い～中程度	中程度	高い
参加ハードル	低い	中程度	高い

① 交流レベルが低いイベント

交流が明確に発生しない場合であっても、同じ空間を共有すること自体に意義があると考えられる。障がいのある子どもとない子どもが同じ場に存在する経験は、直接的な関わりがなくとも、「違いの存在を自然に受け入れる」契機となる可能性がある。

また、運営面においては準備負担が比較的少なく、当日参加も可能であることから、参加者の参加ハードルが低く、継続的な機会創出に適した形式である。一方で、その場における交流の成果は可視化されにくく、即時的な効果検証を行うには不向きである。

② 交流レベルが中間のイベント

共有物や軽度の関わりをきっかけとして、自然発生的な交流が生まれる形式である。スタッフの働きかけにより交流が促進され、無理のない関係構築が可能である。この形式は、交流レベルが低いイベントに比べて一定の交流が生まれやすく、かつ高い交流レベルのイベントほどの運営負担を要しないため、実施と効果のバランスが取れた形態であるといえる。

③ 交流レベルが高いイベント

グループ活動や協働課題を通じて、子ども同士のコミュニケーションや助け合いが明確に発生する形式である。配慮行動や役割分担など、多様性理解につながる行動がその場で可視化されやすく、子どもへの効果や行動変容を確認しやすい。

一方で、事前のグループ編成やファシリテーター配置、ルール設計等の準備が必要であり、運営負担が大きい。また、事前申込制となる場合が多く、保護者にとっての参加ハードルが上がる傾向がある。

(5) 総括

最後に、本事業の試行結果から、交流機会の創出においては、「交流させる」のではなく「関われる環境を断続的につくる」という視点が重要であると考えられる。単発的に密な交流を促す取組だけでなく、多様な子どもが同じ空間で過ごす機会を積み重ねることにより、自然な理解や受容が育まれる可能性がある。

また、障がいの有無に関係なく、初対面同士の緊張感が子ども同士の交流において障壁となる場面が多く見られたため、スタッフや周囲の大人の働きかけも重要なポイントである。適切な声掛けや関わりのきっかけづくりにより、子ども同士の関係構築が促進されることが確認された。

さらに、障がい児の参加に関しては、保護者の心理的ハードルが参加の可否に大きく影響することが分かった。障がいのある子どもが安心して参加できるかどうかは、運営側の理解や配慮、医療や福祉の有資格者の配置があるかによって左右される傾向が見られた。障がい児への理解がある運営体制や、必要に応じてサポートできるスタッフの配置は、保護者の安心感につながり、参加促進の重要な要素であると考えられる。

加えて、協働活動型の取組では交流の成果がその場で現れやすい一方、自由参加型の取組は実施しやすく継続性が高いなど、それぞれに異なる特徴があることが明らかとなった。したがって、特定の形式のみを推奨するのではなく、目的や地域の実情に応じて、交流の程度の異なる取組を組み合わせることが有効であると考えられる。

以上から、今後の交流機会の創出においては、効果が可視化されやすい取組と、地域で実施しやすく継続可能な取組の双方をバランスよく取り入れ、多様な関わりの機会を広げていくことが肝要であるとの結論に至った。